

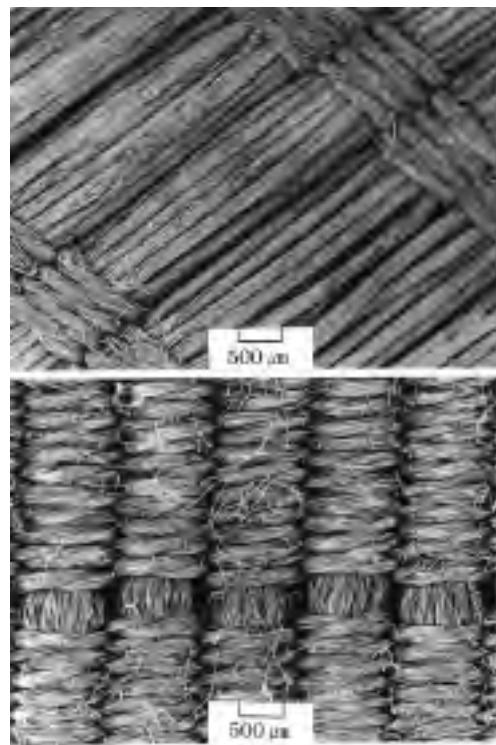
写真Ⅳ-60 飾り糸使用織物  
(1:表面, 2:裏面, 3:断面)

与え、婦人服地、子供服地、カーテン地などに広く使用されている。

### 61. 緋

緋は1本の糸を何色かに染め分けた緋糸を用いて平織、斜文織、朱子織およびその変化組織などに織り上げ、布上に模様を表わした織物で、すでに紀元6世紀頃のインドのアジアンター洞窟寺院の壁画に描かれた仏像の衣に見られることからインド、東南アジアなどがその起源とされ、法隆寺

裂の太子間道（広東錦）とよばれる裂もその一つとされている。緋は世界各地に見られる染織技法で、日本でも古くから様々な緋織物が発展してきた。日本の緋技法は18世紀以降、沖縄から伝わり、琉球緋、薩摩緋、久留米緋、伊予緋、大和緋、佐々緋、村上緋、備後緋、倉吉緋、弓ヶ浜緋、作州緋、広瀬緋などの多くの綿織物のほか八重山上布、宮古上布、越後上布、能登上布、近江上布などの麻織物や、大島紬、結城紬、村山大島紬、西陣御召、白鷹御召などの絹織物や、喜如嘉芭蕉布、竜舌蘭繊維布（桐板）、毛織物など広範囲の織物に應用されている。緋織物の緋柄を表わす緋糸は手結び、手括り、機械括り、織締め（写真Ⅳ-61）、板締めなどの防染技法のほか摺込み、櫛押し、ブロック捺染、刷毛摺りなどの捺染技法やその他抜染技法、風通織組織を利用した技法などがある。また緋によって表される模様は経緋、緯緋、経緯

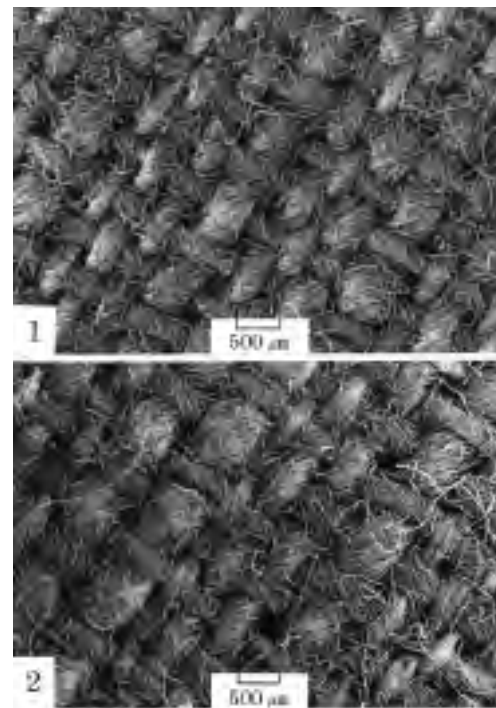


写真Ⅳ-61 緋織機で織締めされた経糸(1)、緯糸のムシロ(2)

緋によって矢緋、十字緋、井桁緋、蚊緋、亀甲緋、銭緋、蜻蛉緋、猫足緋、雨緋などの多種多様な緋柄やそれら緋を組み合わせた緋柄が無数にあって変化に富んだ緋柄が生み出されている。

### 62. 片貝綿紬

片貝綿紬は、新潟県小千谷地方に宝暦年間(1751~1764年)頃から伝わる伝統的な素朴な縞柄の綿紬織物(写真Ⅳ-62)で、織糸には20番手の綿紡績糸に手紡ぎ糸も併用して地風に変化をもたせて織り上げられている。糸染めにはすべて藍のほか刈安、阿仙葉、楊梅、黄蘗、蘇芳、五倍子、コチニールなどの天然染料が用いられ、着尺織物には素朴な自然の風合いと洒落た感覚が活かされている。

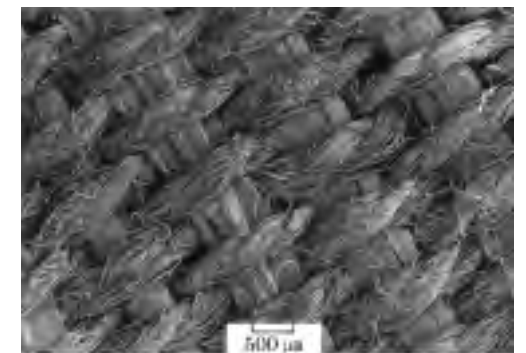


写真Ⅳ-62 1:片貝木綿, 2:片貝綿紬

### 63. 葛布

葛布は山野に自生する葛蔓り靱皮繊維を原料とした織物で、麻布、楮布、科布、藤布などと共に

織物の歴史では古代、縄文時代にさかのぼる最も古いものの一つとされている。現在では葛布は静岡県掛川地方で最も多く生産され、通常経糸には手紡綿糸(現在では綿紡績糸)をはじめ絹糸、大麻糸などが、また緯糸には手紡ぎの葛糸が用いられ手機で平組織に織り上げられている(写真Ⅳ-63)。葛布は無地、縞柄、紺染、茶染などの袴地のほか蚊帳などにも用いられてきたが、現在では服地、襖地、壁張地などの用途に向けられている。



写真Ⅳ-63 葛布

### 64. 葛城

葛城は、JIS繊維用語では「10~20番手の綿糸または経糸に24番手双糸などの双糸を使用した3/1, 3/2などの綾織物」示された45°以上の綾目をもつ左経四つ綾の斜文組織の綿織物(写真Ⅳ-64)で、軍制服、運動服、白衣などの用途に向けられている。

### 65. 金巾

金巾は、JIS繊維用語では「経糸、緯糸に25~50番手程度の綿糸または20番手以上のスパンレーヨン糸を使用した平織物」と示された平組織の綿織物(写真Ⅳ-65)で、通常肌着、敷布、裏地などに広く用いられているが、使用する糸の番手、密度によって広範な用途にも向けられている。